に近く蠶地の上にある大な石切場の南寄で、漣痕は波丘間の距離が一寸八分乃至三寸五分、波丘の高さ二分乃至三分で波頭は可なり尖つて居り波丘側の傾斜は普通のもゝ樣に一方に緩で他方に稍々急である。波丘は規則正しく數十條の平行列となりて地層面の走向北五十度西と同じ方向に走つて居る尙ほ其の層面には植物の小枝や葉の炭化した化石が附着して居り、其の地層が沿岸堆積層であることを明示して居る。

漣痕を觀察した第二の箇所は前の石切場から約四五町東に當つて犬吠岬の東端に近く丁度燈臺の南の斜面に開坑した石切場である。こゝでは砂岩の間に帶黑色の薄い粘土層又は粘土交りの砂層が多く夾まつて居り、層向に沿うて砂岩層を剝すと必ず漣痕が現はれる。こゝの漣痕は前のより稍低くて高さ一分乃至五厘、波丘間の距離は一寸五分乃至二寸、波頭は前のほど尖らず、又波丘頭は多少屈折して必しも直線狀をなさず、從て波丘列は互に平行してゐない。又波丘列の方向は層面の走向に一致せず走向に對し或角度をなす。總ての狀態は前の石切場にあるものよりも稍深い水底で稍弱き流れによつて出來たものであるのを示す。

本論文には老虎灘と犬吠岬との漣痕の美しい寫眞版が附隨して居る。私共は嘗て矢部博士が地質學雜誌第十五卷第百七十四號(明治四十一年三月)公にされた朝鮮慶尙南道晉州附近の侏羅紀砂岩中の美しい漣痕や北海道空知附近の第三紀砂岩中のものゝ寫眞に加へて今こゝに好き地學資料を加へ得たことを喜ぶ。因に云ふ、朝鮮では晉州の漣痕の外に平安南道价川郡外東面倉洞里で矢部博士と摘錄者が同行の際に三疊紀(?)の帶綠色砂岩中に漣痕のあるのを矢部博士が大きな落石で發見されたことを記憶して居る。著者は犬吠岬の漣痕を天然紀念物として指定保存されんことを望んで居られるが天然に露出せる化石と同樣に標本として室內に幾分かを保存して置く方が實は天然物の保存になるのは明亮なことである(S)

新著紹介

○西洋又南洋　理學博士　山崎直方著

四六版本文四七五頁圖版三十二葉、發兌元東京市外西大久保古今書院　定價三圓二〇　大正十五年二月發行

山崎博士の歐、兩米、濠洲の三大洲に跨がつた世界の旅の獲物を一般の日本人に分配して下さらうとするこの美しい本、そして讀み易くて知らず識らずのうちに讀者をして地理學的智識に富ましてゞ了ふ本を手にして紹介子は何んな風に地球の讀者に御奬めしたらよいか考へざるを得ないのである。博士は曩年「我が南洋」を公にされて我新領土の變つた天然の美しさを明かにされた。我國の地學者によつて著される旅行記の甚しく乏しい間に「西洋又南洋」となつて大きく咲いたこの花は南洋の潮の香よりもより高い匂ひを放つてゐる。紹介子の一人の知己は一夜にして感興の湧くにまかせて讀了したい

ふ。それは私共の求めて居る地學的現象と其の說明とが流暢な筆で書かれて居る爲めである。地學研究者許りでなく世界的智識を擴める爲めにどの家庭にも御奬めしたい明名である聽らく本書は發售以來月餘を出でずして數版を重ねたといふ誠に地學の爲めに喜びに堪へぬ次第である。

○火田の現狀

朝鮮總督府調査資料第十五輯　善生永助編

四六版二〇二頁圖版五葉大正十五年三月發行

火田即ち內地の燒畑は朝鮮の山地、殊に平北咸南江原に廣く分布されて居て、山地を荒廢することの甚だしいものであるが、今直に之を禁止することも出來ぬ樣に根の生えて居るものである。本調査書は火田の現狀を數量を擧げて說明し次に火田の慣習、火田民の生活、最後に對策について詳說してある。火田及火田民に關する對策は朝鮮の林政、治水、布いては社會上重要な問題であつて、人文地理學上の一大研究問題である。本書に依つて火田及火田民の攻究は我等の大問題であることが了解される。

○市街地の商圈

朝鮮總督府調査資料第十四輯　善生永助編

四六版五七三頁　附圖及圖表七葉、大正十五年三月發行

朝鮮に於ける大小の都邑九十一箇所に亘つて資料を蒐集して其の貨物及金融上に有する商業勢力の實情を明かにしたものである。此の書によつて充分に朝鮮都市經濟の大勢を窺ふことが出來る。都市地理學上著しい著述である。殊に附圖の朝鮮產業地圖（縮尺二百五十萬分一）は朝鮮に於ける農產、林產鑛產及水產の種類と其の分布を明示して居るから地理敎育に資する所多大なものがある。

雜報

○黑海の海洋學的研究

最初の黑海の研究は一八九〇年及一八九一年にロシアの水路部によつて行はれ、黑海の特異な性質を發見した、爾來三十五年を經た現時では海洋學的見地及調査方法が進步し、此の海盆の海洋學的狀態を再び研究する必要が起きた。そこでロシアのウクライナ共和國の水路部はこの事業を遂行する事を計劃し、第一に每年四回、クリミアの南角を通ずる子午線に沿うて測量することにした。而して一九二三年乃至二五年に於ける海洋學的事項の季節變化の材料を獲た。此の外一般海洋學の事項に對しては特に一九二四年及二五年の六月—七月に於て探檢した、即ち一九二四年には黑海の東部を一九二五年には東西兩部を研究した、合計百箇所の觀測地點では溫度、鹽分度、比重、酸素、二硫化水素及水素イオンの量、水の色及透明度の測定並に生物學的觀察を行つた。而して四二五〇個の觀測檢定を行ひ。就中瓦斯分析は二千以上行つた、深海錘測も行ひ、深海堆積物は約六〇糎の深さの斷面に就て調査した。